「アミーリア」に至る道

――フィールディングの小説の方法――

佐久間　信

（一）

一七四八年十月、フィールディングは四十一歳にしてウエストミンスターの治安判事に任命され、翌四九年一月には、その管轄はミドルセックス州全体に及ぶ。既に「ジョウゼフ・アンドルーズ」は四十二年に出版され、四六年から四八年にかけて書かれたと推定される「トム・ジョーンズ」は四九年二月に出版される。この出版を機に、治安判事フィールディングは、世人の様々な批判を一身に浴びることになる。批判は主として作品の「卑猥さ」に向けられていた。時代は当時の典型的な商人で結局主人の娘と結婚した勤勉な徒弟リチャドソンの実際的教訓物語パミラが競って読まれた時代である。新興中産階級の人々は、彼等の行為を律すべき卑近な「道徳の手引き」を要求していた。ハクスレィの所謂「全面的真実」を描いた書物は、当時の人々の抱いていた健全な（フィールディングに於いては偽善と同意語である）中産階級的道徳に抵触するものとして糾弾される運命にあったのである。一七五〇年二月及び三月ロンドンを襲った地震について、ロンドン主教トマス・シャーロックは三月、教書を発し社会道義の頽廃が地震の原因だとし、道義頽廃の一として春本の公刊をあげた。シャーロックが、春本の中にフィールディングの作品を意識していたかどうかは明らかではないが、オールド・イングランド紙は主教の言葉を利用し、トム・ジョーンズを攻撃している（註一）。現代の人間からすると想像もつきかねるような話ではあるがフィールディングが判事職にあった時代は、まさにそのような時代であったのである。卑猥、低俗を故としてジョンソン博士を始めとする当時の智識階級の人々から糾弾されたことは、反面、偏狭な道徳に捕われるのを愚とする精神をフィールディングが持って居り、「リチャードソンの後で彼を取上げると、煖炉であたためら

れた病室から、そよ風吹く五月の日のひろびろとした芝生に出た思いがする(註二)」のは、人為の規則に縛られ、あるいは縛られているのを装う美徳の擬態に哄笑をもってこたえるこの作者の態度によるものである。それを守って行くことが最も賢明な保身の道であるという意味での道徳を作品の構成原理としたパミラへの諷刺「シャミラ」及びその小説への発展「ジョウゼフ」を以って出発した小説家フィールディングの方法は、簡単に言えば偽善或は功利的道徳に対する諷刺の方法と言える。しかし、諷刺の方法には同時にまた恐ろしい陥穽が口を開けていることをこの作者は悟らなくてはならなかったのである。アミーリアに至るフィールディングの描いた軌跡を辿って見ることによって、その陥穽の底を覗くことが出来よう。というのは、アミーリアは前二作と可成り異った姿を見せているからであり、ディジョンのように「彼の中の治安判事が次第に芸術家を殺して行った」と言っただけでは片付かぬ問題がそこには隠されているのである。

アミーリアに至るフィールディングの描いた軌跡と言ったが、彼の白鳥の歌「リスボン渡航記」を無視する意図はない。この紀行の序文には、世間に横行する荒唐無稽な世人を惑わす紀行と違い、真実のみを記し、読者に興味と教化を与えようとする意図のもとに書かれたという「ジョウゼフ」と同類の宣言があり、この作者の真実(この真実が架構の中での真実であるかどうかが問題なのであるが)への執着がむしろ僕らの微笑を誘うが、しかしこの紀行文は、あくまで「ジョウゼ――トム――アミーリア」の作品主系列と切り離して考えなくてはならないものである。紀行、原文ではジャーナルだが、これは小説とは違った読み方を読者に要求する。読者は紀行文だとか日記の中に、裸の、いわば作品の衣をつけない作者、われわれと別にかわった所のない一個の人間「いや、先生、こりゃとんだ所で御眼にかゝりますな。どうも曲亭先生が朝湯にお出でにならうなんぞとは手前夢にも思いませんでした(註三)」というような妙な親しさを籠めて眺められる作者を発見することができる。喘息・黄疸・水腫を併発し、暖いリスボンに転地療養のため航海したおりの日記(リスボンで彼が客死した翌年一七五五年出版)には、ジョウゼフやトムを生み出した男の、精神ではなく自然が、(というよりはむしろ生理といった方が適当であろうが)露わにされている点僕らの興味を惹くのである。フィールディングは死を目前に控えながら、安く手に入れられる、鷓鴣や若鶏で満足できない人間であり、病にむしばまれながら、然も病がその歯をたてることの不可能だった人間であったことは、次の手紙の息づかいから明白である。

"Four Hams, a very fine Hog fatted as soon as may be and being cut into Flitches sent me, likewise a young Hog made into Pork and pickled in a Tub. A vast large Cheshire Cheese and one of Stilton if it be had good and mild"(註四)

この手紙の文面は、彼のいとこに当るメアリ・ウォトリ

ー・モンターギュ夫人の言葉と完全に照応する。「H・フィールディングの死を悼みは致しますが、それは、もう彼の作品を読めなくなったからでは御座いません。あの方御自身が、ほかの誰よりも多くのものを失ってしまわれたと信じているからで御座います。あの方ほど人生を楽しんだ人は一人として居りはしません」(註五)。死に至るまでフィールディングは陽気で頑健な生粋のブリトン人であったわけで、従って、アミーリアにおける前二作との色調の差を、作者の体力の衰えに帰そうとするのは、少々滑稽な的外れのようである。「トム」と「アミーリア」との間に存在する「二年ではなく、二十年の隔り」(註六)は、いったいどこから生じたものであろうか。

(二)

フィールディングの小説の根本にあるもの、というより、彼に小説を書かせ、その巧緻をきわめた作品の構成原理となったのが、既存の道徳律や当時の社会制度に対するデカルト的な懐疑であり(註七)、これが諷刺の方法となって表われていることは既に述べた。十八世紀の現実に照明を与え、ことばによる幻像の世界を造り出すためには、彼の採用した方法がもっとも効果的であったと言える。守った方が賢明な規約はあったろうが、守らねばならない掟は存在しない社会であったからだ。また、やがてフォーサイト家として興隆し壊滅する新しい社会層が、賢明な処世術をもって(ロビンソン・クルーソー、パミラ、いや女賊モル・フランダースにしても同じ事である)その力を着実に養って行く反面、フィールディングがその一員であるジェントリー階級が、実質的な力を失った時代である。(パリ・コンミューンの時代に、なお、自分のサロンを維持できた貴族が、実際は実業に従事して居り、逆に言えばそのためにサロンの維持も可能であったわけで、若しもバルザックならばそれを描写の対象にしたに違いないその貴族の実業家としての行動を、「感情教育」の中で、フローベールがまったく触れていないことが思い出される。そして、フィールディングは経済面はともあれ、家系から言えばまさしく上流階級に属する人間だった。)絶対的な価値基準を失った無秩序な社会の諷刺による笑いを武器としてフィールディングは出発する。これが最も端的にあらわれているのが彼の政治諷刺劇である。「あの連中のポケットには、みんな穴があいて居ります。ですから踊っているうちには、せっかく貰ったお金も、みんな落ちてしまうわけです。それを奴は拾い集めるのですから、いくら気前をみせても一銭の損にもならないという仕組です、云々」といった主旨の作者メドレイ(=フィールディング。芝居の作者を芝居に登場させることは、舞台稽古方式を得意としたフィールディングお好みの方式である)の註釈で幕が下りる「一七三六年の歴史的記録」がその好例と言えよう。こゝではコルシカ政界の出来事ということになっているが、反対党議員連中の討議の最中、クウィダムが現われ、それぞれのポケットに金を押しこ

んで、味方に抱きこみ、そのあと提琴をひいて一同を踊らせる場面など、きわめて明白な時の首相ウォールポールへの揶揄である。これに対する政府側の新聞の警告に対し、一七三七年五月「一七三六年の歴史的記録」の刊行の際に付した序文には「もし造化の神がこの私に、悪と偽りとを嘲笑する多少の才なりとも与えてくれているとすれば、出版と劇場の自由が存続するかぎり、言いかえれば、わたくしたちの間にいさゝかの自由でも残るかぎり、私は怠らずまた恐れずにその才をふるうであろう」と、以後の彼の小説作品にも通ずる彼の人生態度が生地のまゝの姿で表わされている（註八）。

同じく一七三七年ウォールポール内閣の発した検閲令が議会を通過するに及んで、フィールディングの劇作活動には終止符が打たれるが、その「悪と偽りとを嘲笑する」精神は、ただ実際社会の腐敗の暴露嘲笑といういわばおもてに表われた現象にとどまらず、一層その刃を鋭くして、以後の彼の小説作品の中に生かされているのである。

彼の劇に表わされた政治諷刺とほぼ同一平面において考えられるのは、一七四三年刊行された「雑文集」に収められている「大ジョナサン・ワイルド伝」である。この「伝記」は一七二五年処刑された実在の盗賊を主人公とはしているが、所謂実録物とはぜんぜんその性格を異にし、大首相ウォールポールを大盗賊に二重映しにして、同時に政界に深い関係をもつ「ブルジョワ社会のあらゆる様相を（註九）」彼はこの作品に於いて諷刺しているのである。鉛の心を抱き、つらゝの知性をもってアン女王統治下の英国を、ヤフーの住む国に二重写しにしたスイフトとの類縁は改めて説くには及ぶまい。「ウィッグ党もトーリー党も、いや政党組織そのもの及び官職に附随する腐敗などすべてがニューゲイト監獄へと移入され、冷静な打算の上で罪を犯す犯罪者や不幸な負債者たちの織りなすその幻想的な世界の中では、一切のものが新たな視点から、深い洞察をもって明晰に描き出されているのである。選挙戦が監獄の中で、悪党によって構成される二政党間に行われる。その際両党の用いるキャッチフレーズは『ニューゲイトの自由』であり、この言葉はフィールディングに従えば『一つの隠語で略奪を意味する』のである（註十）。しかし当時の政界事情に対するこのような表面的な諷刺のみが、この作品を支えているわけではないし、もしもそれだけであったら、今日この大盗伝を文学として顧る者はいないはずである。「ガリバー旅行記」を読む際、別にアン女王時代の宮廷及び政治情勢に対する作者の怒りの諷刺による発現として見る必要が必ずしもないことゝこれは事情を同じくする。「高瀬舟」の中で庄兵衛が主人公喜助の中に人間の理想像を見出すと同じ精神がフィールディングを駆って「偉人ジョナサン・ワイルド」に対する「善人ハートフリー」を書かせたのであろう。序文でフィールディングはこう言う。「とかくわれわれは善良さと偉大さとを混同し、偉大さの中には善良さが含まれるように考えるが、これはたいへんな誤りである。善良さを構成する諸要素と偉大さのもととなる諸要素と

は全然その質を異にする」この命題につづけて第一章では「偉大さと善良さとの間には天と地ほどの相違がある。というのは、偉大さは人類にあらゆる禍をもたらすものであり、一方善良さはその禍を取除くものであり」善良であるが偉大さのない人間は、ひとの嘆賞の対象にはならないにしろ、愛情には十分値する、と言葉をつづけて行く。「庄兵衛は只漠然と、人の一生というような事を思って見た。人は身に病があると、此の病がなかったらと思う。其の日其の日の食がないと食って行かれたらと思う。万一の時に備える蓄がないと少しでも蓄があったらと思う。蓄があっても、又其の蓄がもっと多かったらと思う。此の如くに先から先へと考えて見れば、人はどこまで往って踏み止まることが出来るものやら分からない。それを今目の前で踏み止まって見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は気が附いた」ところがこの喜助は意識的に踏み止まっているわけではない。「いかにも楽しさうで、若し役人に対する気兼ねがなかったら、口笛を吹きはじめるとか鼻歌を歌い出すとかしさうに思われる」のである。喜助は自己の心情に忠実なために安楽死を与えるという殺人罪を犯し、善人トマス・ハートフリーは善良なるがために偉人ワイルドのために破滅させられニューゲイトに送られる。こゝでは、「偉大さ」は「悪」であり、「善良さ」は「愚鈍」と同意語なのだ。善良さが愚鈍であり、愚鈍なるが故に、法によって裁かれる。ところが、「大ジョナサン・ワイルド伝」の著者はウエストミンスター及びミドルセックス州全体をその管轄とする治安判事に任命され、そののち「アミーリア」が執筆、刊行されるのである。世間で普通認められている価値基準を逆転させること、いわば、双眼鏡を逆さまに構えて世間は眺められるのである。（貞操を持すこと極めて固く、その報いとして、彼女の凌辱にあらゆる情熱を傾けた名家の子息の奥方に収まり、世間の大賞讃を浴びたパミラは、気取りの権化として描かれねばなりません。ジョウゼフは道中追剝ぎに身ぐるみ剝がれ道端に昏倒します。馬車が通りかゝります。彼は正気づきますが人前に出られるような恰好をしなくては馬車には乗れぬ、と言いはります。「かくもきびしい礼節をこの青年は心得ていたのである。愛すべき女性パミラの一点の瑕瑾とてない模範とアダムズ氏のすぐれた説教の効果はかくも強いものであったのだ（註十一）」ジョウゼフに着せるため外套を脱いでくれるのは、決して胸を張って世間を歩ける人ではありません。のちに鶏舎荒らしの廉で追放される馭者の助手でなくてはならないのです。）

こゝで注意しなくてはならないことは、双眼鏡を逆さに構えているのは、決して旅から旅へと歩く、ジョウゼフやトムではない、という事である。一見したところジョウゼフは女主人の好意を無視したため追い出され、実は立派な家柄の生まれのトムも始めは捨児であり、彼等の遍歴により物語が展開するところからピカレスク小説と考えられようが、他ならぬ、この主人公（若しピカレスク小説に属すると考えるのなら「アンチ・ヒアロー」（註十二）が、彼等の出合う人間や社

会の風習を批判的に眺め、シニカルな意見を吐くことがない点、この考えには無理があろう。批判はフィールディングにあっては決して、作中人物によってはなされず、ちょうど「舞台稽古方式」の芝居のように、小説の舞台に顔を出す作者自身の手によって行われるのである。作家は作品の表に姿を見せてはならぬ。いゝかえると作品は非人格的存在の手によって書かれたものゝようでなければならぬというフローベールの創作方法（フローベールによって既に破られ現代に於いてはこの方法にもとづく創作が不可能視されるに至った）とは対照的な立場である。作家の諷刺の対象となる側は、世間普通の視角の逆から眺められ、皮肉と笑いの対象とされる。それでは主人公の側はどうなるのであろうか。双眼鏡によって拡大（愚劣→善良）されもしなければ縮少（偉大→悪）もされない。言いかえると、作者の批判の眼は、主人公には及ぶ事はないのだ。フィールディングの語調も大いに手伝っての事であるが、「五月の日のひろびろとした芝生に出た思いがする」次の引用は、主人公トムが作者によってまったくひづみを与えられず、なまの儘作中に投げ出されていることを明白に示すであろうし、同時に、その明朗さの中に「アミーリア」の暗さが予感されるのだ。

It was now a pleasant evening in the latter end of June, when our hero was walking in a most delicious grove, where the gentle breezes fanning the leaves, together with the sweet trilling of a murmuring stream, and the melodious notes of nightingales, formed altogether the most enchanting harmony. In this scene, so sweetly accommodated to love, he meditated on his dear Sophia. While his wanton fancy roamed unbounded over all her beauties, and his lively imagination painted the charming maid in various ravishing forms, his warm heart melted with tenderness; and at length, throwing himself on the ground, by the side of a gently murmuring brook, he broke forth into the following ejaculation.

'O Sophia, would Heaven give me thee to my arms, how blest would be my condition!... Oh! my fond heart is so wrapt in that tender bosom, that the brightest beauties would for me have no charms, nor would a hermit be colder in their embraces. Sophia, Sophia, alone shall be mine. What raptures are in that name! I will engrave it on every tree.

At these words, he started up, and beheld—not his Sophia, no, nor any Circassian maid richly and elegantly attired for the grand Signior's seraglio. No; without a gown, in a shift that was somewhat of the coarsest, and none of the cleanest, bedewed likewise with some odoriferous effluvia, the produce

of the day's labour, with a pitchfork in her hand, Molly Seagrim approached. Our hero had his penknife in his hand, which he had drawn for the before-mentioned purpose of carving on the bark; when the girl coming near him, cried out with a smile, 'You don't intend to kill me, squire, I hope!' —Why should you think I would kill you?' answered Jones, 'Nay,' replied she, 'after your cruel usage of me when I saw you last, killing me would, perhaps, be too great kindness for me to expect.'

Here ensued a parley, which, as I do not think myself obliged to relate it, I shall omit. It is sufficient that it lasted a full quarter of an hour, at the conclusion of which they retired into the thickest part of the grove,（註十三）

長い引用を敢て行ったが、こゝで注目しなければならないのは、フィールディングの諷刺の方法の対象とならぬ登場人物が「真の叡智と善良さを備えた人は、人間をあるがまゝに受け取ることに満足し、その欠点に対し不平を洩らさず、匡正の労をとることもない（トム・ジョーンズ二巻七章）」まさにその叡智と善良さを備えた人、即ちフィールディング自身により、倫理的判断を放棄した場において描き出されているということなのだ。トムを「内省ぎらいな男（エクストローバート）」とするマックキロッブの言葉も（註十四）「想像力を一かけらも持っていない」とするヘンリー・ジェイムズの評も（註十五）そういった意味で、受け取る必要があるのである。諷刺の刄は瞬間瞬間の情熱にしか、価値を見出せぬという袋小路に作者を追いこみ、それがフィールディング自身によって意識された時に、陰鬱なアミーリアが誕生するのである。

（註一）ホームズ・ダドン「ヘンリー・フィールディング」七一七頁
M・P・ウィルコックス「フィールディング伝」二三四頁
（註二）コールリッジ文学評論（オクスフォード大学出版）一五三頁
（註三）芥川龍之介「戯作三昧」
（註四）ウィルコックス「フィールディング伝」二七二頁
（註五）ウォルター・アレン「英国小説」五〇頁
（註六）エドマンド・ゴス「十八世紀文学」二五七頁
（註七）イーアン・ウオット「小説の誕生」一三頁参照
（註八）朱牟田夏雄「フィールディング」六二頁参照
（註九）アーノルド・ケトル「英国小説序説」第一巻四八頁
（註十）同書・同頁
（註十一）「ジョウゼフ・アンドルーズ」エブリマン叢書三一頁
（註十二）F・W・チャンドラー「悪漢の文学」第一巻第一章参照
（註十三）トム・ジョーンズ　五巻五章　スチーヴン編全集一巻
二二九—三〇頁
（註十四）A・D・マックキロップ「英国小説初期の巨匠達」
一二〇頁
（註十五）ヘンリー・ジェイムズ「プリンセス・カサマッシマ」序